

多久市と小城市が共同して創設する「公立佐賀中央病院」が、今年7月に開院します。これまで以上に利用しやすく、すべての人にやさしい地域密着型の病院をめざし、着々と準備を整えているところです。

今回は、前佐賀県医療センター好生館長で多久小城医療組合顧問の佐藤清治先生と、多久小城医療組合管理者の横尾俊彦市長が語り合う、新春対談をお届けします。



うした素地を生かし、院内外を問わず強固に連携することで、利用されるみなさんに「安心して通える」病院と想っていたいただきたいですね。

佐藤 そのためにも健康相談ができる場を設けたり、魅力的な絵画などのアート作品を飾ったりといった、治療以外の要素も充実させていきたいといったと考えています。健康に不安がある人や患者さんだけではなく、その送迎や付き添い、お見舞いなどで来院されるご家族やご友人も含めて、みなさんに気軽に来ていただけたらうれしいです。

市長 いいですね！足を運ぶ目的が治療以外にもあれば、新病院がより身近なものになり、健康意識の向上や安心にもつながりそうです。

早めの予防で健康と命を守る

佐藤 県内の健診受診率や実施率を底上げするために、さまざまな取り組みがなされていますが、思うようには成果が出ていません。しかし多久市は、県内はもとより全国有数の健診実施率を誇るまでに上がりました。市長はどのようにして市民のみなさんに伝えられたのですか？

市長 全国2位の表彰を頂きました。折に触れて、何度も健康の大切さを話しました。市民のみなさんからは保健師の説明も評価されました。健診の数値を見せつつ、今後どういう症状が出てきてどうなるのかを具体的に話すそうです。中にはがんを早期発見できたと感謝されたなどの話を伺うと「やってきて良かった」と実感します。

佐藤 心に届く話し方だからこそ、市民のみなさんの行動につながったのでしょうね。特に、10年生存率が全体で約6割弱のがんのような病気は、早